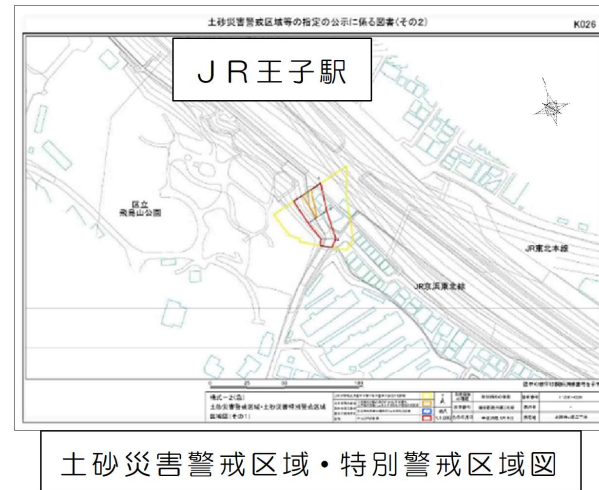
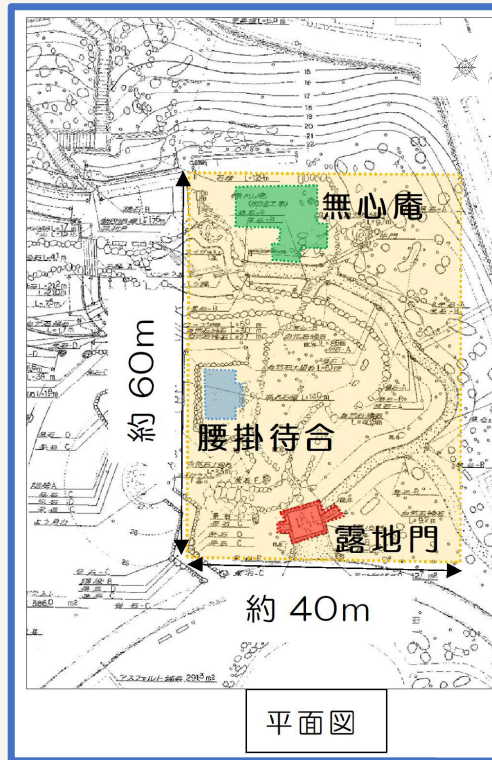


第 1 回旧渋沢庭園保存活用計画検討委員会 事業概要

令和8年9月18日（金）10:00～12:00 飛鳥山博物館講堂

1. 旧渋沢庭園概要



	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15
委員会 発足・継続		→							
保存活用計画 策定		→							
旧渋沢庭園 設計・工事					設計		工事		
土砂災害対策	設計			修正設計	工事				

※保存活用計画の策定に応じた土砂災害対策の修正設計を行い、土砂災害特別警戒区域の対策完了後、無心庵の再興に着工する。

1. 旧渋沢庭園概要

設立年 明治12年（1879年）

敷地面積 約28,000㎡（8,470坪）
※最終的な渋沢栄一翁の所有地（明治34年（1901年）時点）

沿革

和暦	西暦	出来事
明治10 (明治11)	1877 (1878)	飛鳥山に土地を購入 (飛鳥山に土地を購入、別荘を設ける)
明治12	1879	別邸 落成、暖依村荘と名付ける
明治33	1900	家屋(日本家(日本館)・西洋館等)改築(新築)、落成
明治34	1901	全体の完成、本邸となる
昭和6	1931	渋沢栄一翁 逝去 (遺言により財団法人竜門社へ寄贈)
昭和20	1945	空襲で焼失



2. 旧渋沢庭園の現状

焼失した建物と、当初の様子を留める礎石・飛石・流れの跡をつなげて考える

庭園の特徴

建物と園地が調和した明治期を代表する折衷式庭園であり、和と洋を具備した近代庭園です。

現況の重要点

建物や門扉の上部構造は存在しない一方、当時の様子を伝える建物の礎石や庭園の飛石、流れ等の地形などが残っている可能性が高いです。



2. 旧渋沢庭園の現状

焼失した建物と、当初の様子を留める礎石・飛石・流れの跡をつなげて考える

無心庵の歴史的役割

徳川慶喜の名誉回復・復権に向けた午餐や、国内外の来賓をもてなす茶会など、歴史的な事件（出来事）が行われた場所でした。

無心庵の主な出来事

- 明治32年6月 飛鳥山別邸内に茶室を新築
- 明治34年11月 還暦内祝の園遊会
- 明治38年7月 茶室で午餐を供す



無心庵



待合

3. これまでの取り組み

無心庵部会

再興に向けた基本方針、課題の共有

土砂災害警戒区域及び土砂災害特別警戒区域の対策

関係機関協議、設計等

民間や地域の皆さまによる取組

- ・ 観光協会による支援や茶会の開催
- ・ 飛鳥山公園マネジメント協議会における
公民連携による公園の魅力向上、情報共有

3. これまでの取り組み

行政中心から、公民連携の「挑戦の連鎖」へ



2019 渋沢栄一プロジェクト

新一万円札の発行を契機に
民間主導の会議体を起点と
して連携を強化



2021 大河ドラマ館・Park-PFI

情報発信、飲食、実証の
新しい担い手



2022 指定管理・ マネジメント協議会

多様な主体が同じ方向
を向く運営へ



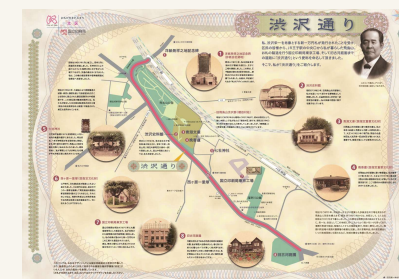
2023 150周年プロジェクト

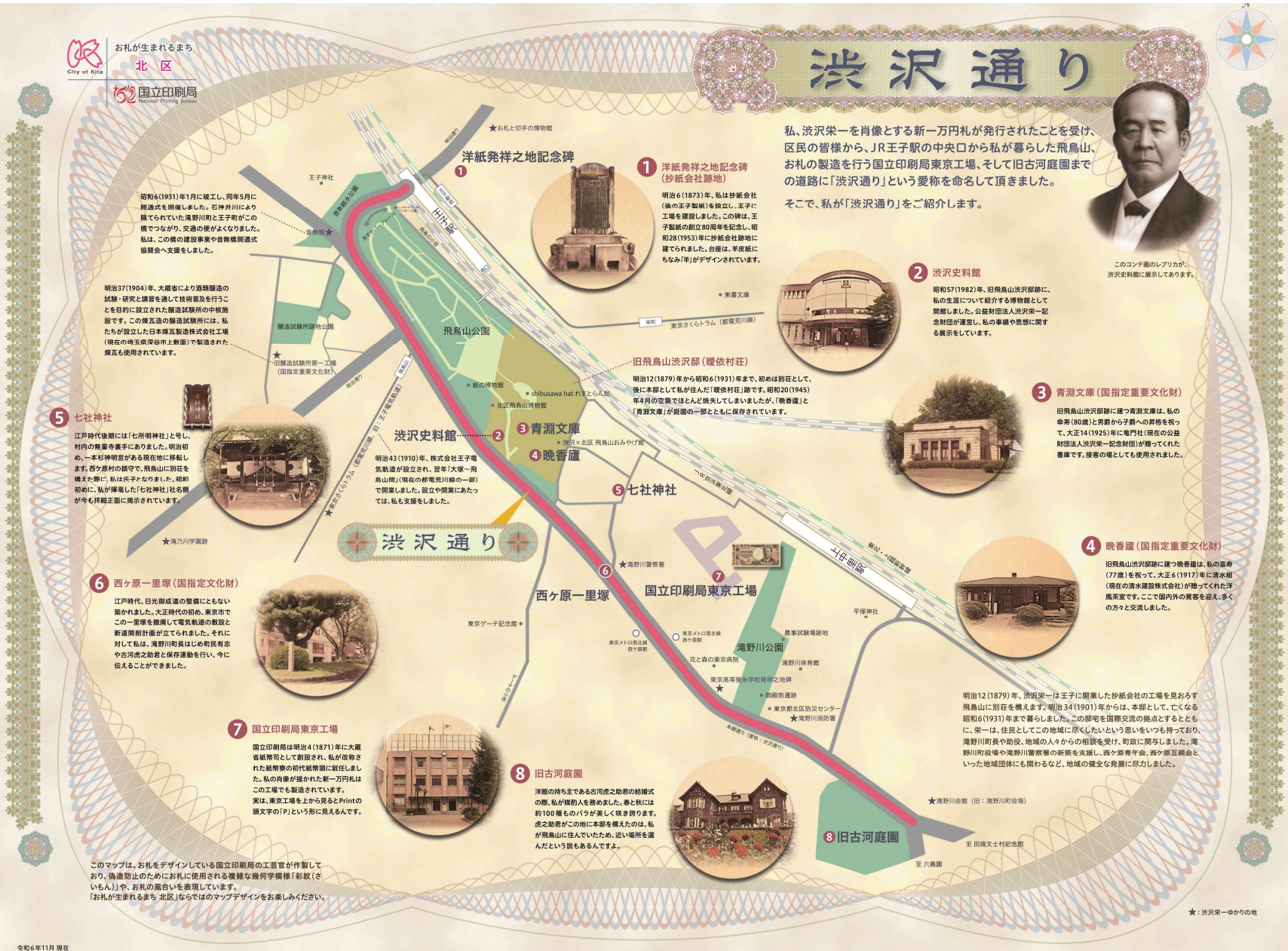
プレイヤーの相談・
実行支援を一本化



2024 愛称名設定・渋沢通り

活性化、愛着と誇りの
醸成





学生演習から見る 観光活用の方性

資料 3 - 2

東洋大学「国際観光文化演習」より

観光上の課題

人物 魅力を身近に

若者 認知・関心を向上

回遊 公園・施設を接続

学生提案の視点

物語 心情・決断

体験 歴史・文化・自然

発信 対話・SNS・連携

保存活用への示唆

知る 思想・人物像

感じる 庭園で文化体験

巡る 飛鳥山へ回遊

歴史文化を「知る・感じる・巡る」観光・交流拠点へ

保存 + 物語 + 体験 + 回遊

4. 活用に関する今後の検討の着眼点

旧渋沢庭園を核に、多角的な価値創造と持続可能な地域活性化を目指す



学び

歴史や文化、また遺構復元プロセス等を伝える

体験

茶会、庭園案内、学校連携、文化体験

交流

区民、来訪者、専門家、事業者が出会う場へ

ストーリーテリング

渋沢通り沿いの多様な資源を一貫した物語として発信

未来志向の継承

若い世代の人材育成の場として渋沢精神を伝える

5. 旧渋沢庭園保存活用計画策定の意義

価値を明確にし、価値を損なうことなく活用する方法を定める



本イメージは、委員会で考え方を共有するためのイメージであり、設計案や完成予想図ではありません。

遺構の調査

分析、整理

本質的価値の正確な継承

価値の明確化、劣化消滅の防止、将来像の共有

保存と活用の調和

ルールの設定、過度な改変の抑制、地域づくりへの貢献

推進体制等と合意の形成

関係者の連携、持続可能な管理